

【リサイクル率が大きく伸びた理由】（補足説明資料）

作成：アルミ缶リサイクル協会

Rev：01 2020年7月

2019年度のリサイクル率が97.9%と、前年よりも一気に4.3ポイントも伸びました。
この理由について本資料にて補足説明をさせていただきます。

まずリサイクル率の算出方法について簡単にご説明した方がご理解し易いと思いますので、算出方法をご説明致します。

- ・リサイクル率とは、1年間に国内で消費されたアルミ缶が国内外でどれだけ有効に利用されたかを示す数値です。
- ・まず分母となるアルミ缶消費量は、「アルミ缶需要予測」の実績缶数に缶重量を掛けて算出します。
- ・分子の一つは国内での再生利用量ですが、これは全国の76事業者から利用量を聴取して集計したものです。
もう一つは、貿易統計から得たUBC（使用済み飲料用アルミ缶）輸出量です。
尚、分子の数値には水分や砂、塗料などが含まれているので、組成率（2019年度は87.8%）を掛けてアルミ分だけの数量を計算に使用します。

このようにしてリサイクル率は算出されますが、全国には当協会の聴取対象となっていない小規模な再生事業者様も多数あり、2018年度までは毎年20,000トン前後が未把握分として当協会のリサイクル率計算からは除外されています。

さてそれでは、2019年度のリサイクル率について説明致します。
2019年度の国内アルミ缶消費量は前年よりも200トン減少し、国内再生利用量も2,500トン減少しましたが、UBC輸出が組成率考慮後の数値でも16,600トンも増加したため、国内と輸出のトータル再生利用量が14,100トン増加しました。
この結果が、97.9%のリサイクル率となりました。

2019年度は、周辺国との関係悪化や米中貿易摩擦の影響等を受けて国内製造業が低迷し、アルミ再生地金の需要も大きく落ち込んだ模様です。（アルミ合金協会の発表でも、鋳物ダイカスト向けの二次合金の需要は▲80,000トンの見込みとのこと）

当協会の UBC 再生利用量調査に協力頂いている再生事業者 76 社においても、鋳物や脱酸材向け等に再生地金を製造している会社が多く、全体で 2,500 トン、中小事業者（UBC 利用が年間 1000 トン以下の 53 社）だけでも減産や休止等で計 1,500 トンも利用量が減少した模様です。

こうした状態は、当協会が未把握な再生事業者（計 20,000 トン規模）も同様と思われ、特にその多くは小規模事業者のために再生地金需要減の影響を大きく受けていると推測されます。

このため、これまで当協会が未把握であった事業者が使用していた UBC が余剰となり、UBC 相場の先行き不安（2019 年 4 月と 2020 年 3 月ではプレス品で約 20 円/kg 下落）もあり、需要が旺盛な輸出に UBC が大量に流れたと推察されます。

先にご説明した通り、当協会のリサイクル率は UBC の利用実態調査で把握した数量と貿易統計という、確証ある数値のみをもとに算出しています。

よってこれまで、利用実態が把握出来ない約 20,000 トン前後は再生利用量に加算せず、リサイクル率は 90% 台前半で推移してきましたが、2019 年度は未把握であった UBC の多くが輸出という形で表に現れたために 97.9% という高いリサイクル率になりました。

2018 年とのデータ比較表

リサイクル率算出用データ

単位：トン

	2018 年度	2019 年度	増減	データ元
①アルミ缶消費量	330,664	330,418	-246	アルミ缶需要予測
②国内再生利用量	239,245	236,745	-2,500	再生事業者への聴取
③UBC 輸出货量	70,198	86,855	16,657	貿易統計
④再生利用量合計（②+③）	309,443	323,600	14,157	
⑤リサイクル率（④÷①）	93.6%	97.9%		
（参考）				
⑥組成率	87.6%	87.8%		再生事業者への聴取
⑦弊協会未把握量	21,221	6,818	-14,403	

以上